



弘前大学同窓会報

第27号

発行日 令和8年3月31日
発行者 弘前大学同窓会
題字 吉田 豊 元学長



ヤエベニシダレザクラ

同窓会会長 千葉 信行

この度、弘前大学同窓会会長に就任しました理工学部同窓会の千葉です。微力ではありますが同窓の皆様のご支援・ご協力を頂きながら務めてまいりますので、何卒宜しくお願い致します。

この全学同窓会は、平成11年6月4日に第11代学長故吉田豊先生により設立されました。現在ある理工学部、令和7年に70周年を迎え記念式典を挙行した農学生命科学部、医学部保健学科への改組等もまた、先生のご尽力によるものです。

吉田学長は学生時代、米国のリベラルアーツ・カレッジに留学した際、仏教について話を課せられたり、尊敬する教授から源氏物語や俳句について聞かれたとき、自分の教養の足りなさを痛感したといいます。このような経験がその後の教員生活にも生かされ、平成8年2月から平成14年1月まで学長として“地域と共に創造し、世界へ発信する”を実践すべく、式典や入学式・卒業式等での式辞や告辞にて、地域に根ざしながら教養を深め、世界と関わる意識の大切さを述べています。特に、入学式では当地弘前出身の偉人を取り上げ、自己の国際化を促しています。

例えば平成9年4月3日の入学式では、明治を代表する教養人として本多庸一を紹介しています。本多は幾度も極度の苦難に遭いながら英学の勉強を続け、キリスト教に触れるや伝道活動にも進んで従事し、その甲斐があってやがてキリスト教徒と

して名をなし、弘前キリスト公会をおこし、日本人として初代の青山学院院長を務め、日本の精神界の長老に君臨されました。極度の失意を経験しながらそれらに堪え抜いた力は稀にみる教養人だったからではないかと評しています。即ち、10歳で大学・中庸・論語等の素読をマスターしていたといわれ、13歳で小野派一刀流剣術を学び、馬術、砲術の修行に励み、津軽藩の学問所である稽古館では朱子学に飽き足らず陽明学を学び、蘭学と英学の勉学に意欲的でありました。このように広い豊かな教養は、いかなる境遇にあってもそれを超えていく忍耐と英知を与え、ひいては世の人の俸せのために貢献できる人間を創ることを郷土の先達が身を以て示してくれている、このことを感じとって欲しいと述べています。

また、明治時代後半から大正にかけて難儀とされた世界外交に立ち向かったのが、本多の薫陶を受けた駐英大使の珍田捨巳と、その義兄の駐米大使佐藤愛麿であり、弘前出身のこの二人の活躍に国際交流の世界平和貢献への源流を見る思いがすると述べています。

本学の国際化教育のために制定した「吉田基金」TOEIC賞など、数多くの功績を称え、創立50周年記念会館前に植樹された吉田学長記念樹ヤエベニシダレザクラが静かに春を待っています。

(参考：弘前大学歴代学長告辞集)



弘前大学創立80周年に向けて

弘前大学長 福田 眞作

平素より、弘前大学の教育・研究活動に対し、同窓の皆様から多大なるご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。全国各地、さらには海外において多方面で活躍している卒業生の存在は、本学にとって大きな励みであり、本学における教育研究が社会に確かな力として根づいている証でもあります。

さて、コロナ禍を経て社会が大きく変容を遂げる中、本学を取り巻く環境もまた、これまでにない厳しさを見せています。第一に、人件費や物価の高騰は大学運営を直撃しており、教育研究の質を維持しながら財政的健全性を保つための不断の工夫が求められています。第二に、全国的な課題である18歳人口の急速な減少は、東北・北海道出身が8割以上を占める本学に、より大きな影響を及ぼすことが想定され、学生確保の取り組みは待ったなしの状況です。第三に、本学の使命の一つである「地域に根差した人材育成」に関しても、卒業生の県内定着率が伸び悩んでおり、地域社会や産業界との協働をさらに強める必要があります。

そのような厳しい状況にあっても、弘前大学は立ち止まることなく、次の時代へ向けた挑戦を着実に進めています。その象徴的な成果が、文部科学省「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」への採択です。本学は健康・医療・福祉を基軸としながら、生活習慣病対策、地域のウェルビーイング向上とい

た長年の研究成果を積み重ねてきました。こうした実績が総合的に評価され、これからは国際的にも通用する研究力の強化と、地域の課題解決に資する持続的な研究システムの構築が期待されています。この採択は、本学が次のステージに進むための力強い追い風となると確信しています。

さらに、2029年に迎える創立80周年に向けて、記念事業の展開を始めています。本学80年の歩みは、地域とともに築かれ、同窓の皆様力によって支えられてきた歴史そのものです。この節目を単なる「回顧」に留めず「未来への跳躍」とすべく、教育・研究・国際交流の各分野で新しい取り組みを始動しています。

先行事業の一つが、国際交流と平和教育を目的とした「学生のパラオ派遣」です。太平洋戦争と深く関わるパラオの地を訪れ、歴史の実相を学ぶと同時に、異文化との交流を通じて平和の価値を体感するプログラムです。参加学生からは「価値観が大きく変わった」、「戦争の悲惨さと平和の尊さを実感した」といった声が寄せられています。本学が80周年を機に目指す「国際的な視野と倫理観を兼ね備えた人材育成」を体現する象徴的な事業と位置づけており、大きな手応えを感じています。

結びに、ともに弘前大学の新たな歴史を創り、次の時代へのさらなる飛躍を遂げるためにも、80周年記念事業へのご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。

弘前大学創立80周年記念先行事業 教養教育海外派遣プロジェクト

教育学部3年 鈴木 優生

2025年、日本は戦後80年を迎えました。終戦から80年という月日が流れ、歴史の風化が急速に進む中、私たちは今、戦争の記憶を後世に繋いでいけるかどうかの転換点に立っています。そのような中、創立80周年記念先行事業・教養教育海外派遣プロジェクトとして、第二次世界大戦の激戦地であり多くの日本人が命を落としたパラオ共和国・ペリリュー島の訪問機会をいただきました。

印象に残ったことは、ジャングルに埋もれた零戦や、潮風に晒され朽ちていく戦車の残骸です。人の記憶の風化だけでなく、ものの記憶の風



戦車の残骸(旧日本軍の戦車)

化も深刻な問題であり、私たちが決して忘れてはいけない歴史の一部が消えていく様子に強い危機感を覚えました。このような遺物の消失は、物理的な喪失に留まらず、歴史を後世に伝えるための重要な媒体を1つ失うことにもつながります。それらはかつての戦争の証人ですが、パラオの「戦跡をそのまま残す」という方針をもってしても、自然の猛威に

よる物理的な消失は止められません。歴史の証人が静かに姿を消しつつある今、現地を訪れ、その「痛み」を肌で感じられたことは何物にも代えがたい経験となりました。



平和記念公園

また、今回の研修では現地の短期大学などを訪問し、パラオの人々と交流する貴重な場もありました。そこで驚かされたのは、パラオの方々

の日本に対する深い親愛の情です。「この前の夏に日本へ観光に行ったよ」「日本のこの曲が好きなんだ」と笑顔で語りかけてくれる姿に嬉しさを覚える反面、私たち日本人はパラオのことをあまりにも知りません。この「一方通行の愛」のような現状に、申し訳なさと共に、過去の歴史だけでなく現代のパラオについても私たちが学び、相互理解を深めていく必要性を強く感じました。

このような機会を与えていただいたことに感謝し、戦争から学ぶべき教訓と、今の平和が多くの人々の犠牲や苦しみによって築かれたものであることを未来へ語り継げるよう、学び続けていく所存です。

弘前大学創立80周年記念事業募金のご協力をお願い



弘前大学ホームカミングデイを開催

弘前大学校愛会では、卒業生向けの交流イベント「弘前大学ホームカミングデイ」を行っております。今年度も、昨年度に引き続き東京と文京町キャンパスの2会場で開催しました。

このイベントでは、大学の近況報告や動画上映、各種刊行物の紹介を通して弘前大学の今をお伝えすると共に、卒業生の方からお寄せいただいた心に残る風景（絵や写真）や思い出の味に関する展示など、在学時代を懐かしんでいただける各種企画

をご用意いたしました。

8月の東京開催では、津軽手踊りサークルによる舞踊の披露や、ミニ金魚ねぶたやリングジャムなど弘前大学ゆかりの品があたる福引コーナーが大盛況でした。参加された卒業生からは「東京にしながら大学時代に戻れた」等の温かいご感想をいただきました。

10月の文京町キャンパス開催では、千葉信行弘前大学同窓会長にもご列席を賜り、8月に弘前大学応援大使に就任されたフリーアナウン

サーの千葉真由佳さん（2016年人文学部卒業）のトークショーが行われました。大学時代の「思い出の味」として、人気だった学食メニューについて参加者同士で記憶を擦り合わせる場面もあり、世代や学部を越えて終始和やかな雰囲気でご懇談が行わ



手踊りサークルと一緒に盆踊り（東京会場）



千葉真由佳さんのトークショー（文京町キャンパス会場）

れました。

弘前大学校愛会は、メールマガジンやホームページ等を活用して、本学と学生・卒業生をつなぐネットワーク構築に努めております。今後も卒業生の方々とのご縁が末永く続きますよう様々な取組みを行ってまいりますので、ぜひとも多くの卒業生の方々にご関心を寄せていただけましたら幸いに存じます。



応援大使の千葉さんと福田学長



弘前大学校愛会のイベント・各種企画
<https://hirosaki-u-kouaikai.alumnet.jp/event>

農学生命科学部通信



研究所から学部へ
所属が変わりました

分子生命科学科 教授
中井 雄治

2025年4月1日付で、地域戦略研究所食料科学研究部門（以下食料研）の教員4名（中井、永長、西宮、泉）の本務所属が農学生命科学部となりました。4名それぞれの専門に合わせ、学科も分子生命、生物、食料資源と分かれることになりました。

食料研は、2013年4月に青森市役所柳川庁舎に食料科学研究所として開所し、2014年3月に中井が最初の教員として着任してから約12年にわたって青森市を拠点として研究を行ってきましたが、2025年度中にはラボの引越しが行われ、文京町キャンパスのコラボ弘大7階に移転しました。

移転後は学部学生の配属も予定されており、これまでの研究メインだった仕事が大学教員本来の教育研

究のバランスをとりながら、という形にシフトします。どの学科も食料研の教員を温かく迎えてくださり、感謝しております。一方で、当の教員4名は新たに増えた学部業務に戸惑いながらも一生懸命慣れようと日々努力しているところですが、これまで学部の先生方がいかに大変だったかを痛感しています。学部生に先立って、所属変更と同時に大学院生1名が配属となり、学生がいることによって研究活動に大いにプラスになることをあらためて実感しています。今後、若い学生たちが配属されることによって研究スペースの面では手狭になることは間違いありませんが、それ以上に4名の教員が得るものは大きいと考えています。

今後は、研究所は兼務となりますが、学部の仕事とうまく両立させながら教育研究に励んでいく所存です。弘前で学部の活動が軌道に乗るまでまだ2～3年はかかると思いますが、どうか温かい目で見守っていただければ幸いです。

人文社会科学部通信



大切にしていきたい
弘大とのご縁

宮城県古川高等学校校長
野中 淳
(平成4年 人文学部人文学科卒)

弘前大学を卒業して宮城県の公立高校に奉職し34年目を迎えました。当時の人文学科は2年生からコースに分かれ、私は東洋文化コースに在籍しました。1階にある東洋の共研（共同研究室）は毎日賑やかで楽しく、県外出身で心細かった私を温かく迎えてくれました。弘前城でのコンパ、中華飯を作り続けた弘大祭、もちろん試験前はみんなで学習会、昨日のことにように思い出されます。ゼミは中国文学で植木久行先生にみっちり鍛えていただきました。おかげさまで卒業後はすぐに高校国語教員として採用となり、漢文の授業、特に唐詩の教材は生徒を前に時間を忘れ深く熱く語っていました。

教員としての駆け出しは仙台の商業高校でしたが、その後は県北の大

学進学者の多い高校に長年勤め、弘前大学にはすべての学部卒業生を送り出すことができました。宮城県からは距離がありますが、日帰りオープンキャンパスにも生徒を引率したりしました。懐かしくて共研にちょっと寄ったこともあります。

2024年度においては6月末に入試課の方にお願ひし、3学年PTA研修会で大学の説明をしていただき、また10月末には1・2年生対象に大学出前講座を開催し、弘前大学からは人文社会科学部の葉山先生に講義をしていただきました。弘大には深い縁があり今でも大変お世話になっています。11月に入り、総合型や学校推薦型選抜で大学受験する生徒たちの事前指導に熱が入ってきました。その中で、弘大希望の生徒2名に面接指導を頼まれ、弘大のいいところをいっぱい話し、背中を押してやりました。弘大は芯が強く温かい学生・教官がたくさんいます。発信力と創造力を身につけ、夢を実現できる弘前大学にこれからも生徒を送り続けます。

令和7年度 学生生活支援事業

財務部長 浅利 清一
新型コロナウイルス感染症が収束し、通常の生活に戻りつつあるところに、今度は物価高の波が押し寄せ、主食であるお米の高騰が学生生活に大きく影響及ぼし始めました。本学の経済的困窮学生数は全国平均の2倍となっており、早急な支援対策が必要となっています。このため、緊急支援策として、前期授業期間と後期授業期間に分けて支援事業を展開することとしました。

前期支援事業

～1食50円をポイントで還元～

この支援は、弘前大学生協が提供する「ライス単品」、「カレー」、「内製弁当」の購入に際し、1食当たり

50円を支援する事業です。多数の学生が利用し、最終的に全学で利用した学生数は、延べ8万人を超えました。地元紙でも報道され、同事業に対する高い評価が裏付けられました。



後期支援事業

～金木農場産のお米の無料配布～
全国的なコメ不足と商社等による

教育学部通信



『和顔愛語（わけんあいご）
は廻天の力』

教育学部同窓会副会長
奈良 年永
(昭和38年 教育学部卒)

イソップ物語の旅人とマントの話の中で、「北風」がいくら風を吹かせても旅人はマントを脱ぎませんが、温かで穏やかな「太陽」の陽射しによって旅人はマントを脱ぎました。子どもを育てていくうえで、北風が強すぎて太陽を忘れてしまうと、子どもは殻を被り心を閉ざします。子どもの心の把手は、子どもの心の内側に付いていることから、子ども自身でしか心の扉を開けることができないのです。それを親や教師が無理矢理、それも機械や道具を使ってこじ開けようとします。その結果、取り返しのつかないほどの摩擦が起こるのです。子ども自身がその気になって、心の扉を開くように接していくためには、『和顔と愛語』による方法しかないようです。

『和顔』とは、文字通り気分が和らいでいるような顔・眼のことです。棘がなく、子どもと気を合わせ、仲良くしていこうとする顔・眼のことです。子どもの心の傷や病いのもとを、共感的に受け入れ働きかけ変化を見守っていく、カウンセリング・マインドの滲み出ている顔のことです。一方、『愛語』とは、子どもの立場や身の上を十分に考え与える棘のない言葉のことです。愛語には、落ち込んだり、悲しみのどん底にある時、それを救い勇気づける優しさに満ちた「春風の愛語」と、迷いから目覚めさせ気づかせ、変えてやる短いが厳しい「秋霜の愛語」があります。

このような『和顔と愛語』があれば、子どもは心を開きストレスから解放され、心身ともに健全に育っていきます。子どもは先生方の『和顔と愛語』を求め学校へやって来ます。そして、『和顔愛語』により生まれ変わったように、何事にも本気になって立ち向かうようになるのです。そのような魔法の力を『廻天の力』と言います。

弘大生の就職状況

キャリアセンターでは、就職相談をはじめ、各種ガイダンスや企業説明会の実施など、様々な就職支援を行っています。就職活動を取り巻く環境が大きく変化する中、令和6年度学部卒業者の就職率は99.0%で、対前年度比0.2ポイント増となり、歴代2位の就職率となりました。

就職先の状況を地域別に見てみると、青森県内への就職者は、全就職者823人のうち221人で、26.9%を占めて第1位、次いで東京都が166人で20.2%を占めています。

青森県出身学生の県内定着率は、ここ数年では約60%程度でしたが、



米販売事業の参入は、お米の高騰に大きく影響し、これまでの価格の約2倍の値を付け、安いお米はスーパーの棚から消える日々が続きました。本学の学長をはじめとする役員は、前年末からこの状況を予測し、金木農場の休耕田を復田作付けし、収穫したお米を無料配布する事業に着手しました。業者から仕入れて配布することは可能でしたが、市中の米不足に拍車をかけることになるため、自己完結となる附属施設を活用した支援策とし、同事業について学長定例記者会見で発表したところ、全国から多数の応援コメントが寄せられ、SNS上では、495万人の方が報道内容を閲覧し、6万5千人の方から「良い取り組み」と評価を頂きました。12月15日には文京町キャン

キャリアセンターから



令和6年度は53.7%と減少しました。

また、大学院などへの進学者は、284人(前年度263人)となり、最も高い進学率となりました。

業界研究・企業等研究への支援

キャリアセンターでは、学生の皆さんが職業観や就業機会について考えること、業界や企業を理解し、その魅力等を知ってもらうことを目的に、キャリア教育の一環として企業等見学バスツアーを実施しています。令和7年度も、9月末週に五所川原・青森・八戸の3つのコースで行いました。参加した学生からは、

スで学長による無料配布が行われ、学生たちは長い行列を作りながら喜んでお米の袋(2kg入)を受け取っていました。今回希望した学生数は2866人で、約4割の学生が無料のお米を希望しておりました。残ったお米は、大学生協の学生食堂で学生に対して提供することとしました。これにより、本来値上げする予定だったメニューの価格を引き下げ、学生全体に本学の学生支援を展開する結果となりました。



「企業の雰囲気を感じたことで、就活へのモチベーションが高まった」、「普段では経験できないことを通じて、将来のビジョンが明確になった」など、収穫があったという感想が大多数で、本企画が学生にとって視野を広げる良い機会となったと感じられました。



医学部医学科通信

グローバルWell-being総合研究所
 所長 石橋 恭之
 (昭和63年 医学科卒)

令和7年初め、弘前大学が「地域中核・特色ある研究大学(J-PEAKS)」に採択されました。文部科学省の「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(Program for Forming Japan's Peak Research Universities)」の略称で、「我が国全体の研究力を向上させ、新たな価値創造を促進していくために、(中略)地域の中核となる大学や特定分野に強みを持つ大学に対し、強みや特色ある研究力を核とした経営戦略の下、他大学との連携等を図りつつ、研究活動の国際展開や社会実装の加速・レベルアップの実現に必要なハードとソフト双方の環境構築の取組を支援する」というものです。

日本の大学の研究力は、外国のトップ大学が研究力をさらに高める中で、研究論文の質・量ともに地位の低下が指摘されています。原因と

全国で本学出身者が高い評価

令和7年度のキャリアセンター主催合同企業説明会・研究セミナーとインターンシップセミナーには、弘前大学の学生を採用したい、当社に興味を持ってもらいたいと、全国各地から予想を上回る700社以上の参加申込がありました。

これもひとえに弘前大学卒業生の皆様のご活躍の賜物と感謝申し上げます。これからも高い評価を維持できるように、職員一丸となって学生のキャリア教育や就職支援の充実に取り組んでまいりますので、同窓生の皆さまからも学生へのご支援をいただければ幸甚に存じます。

して、大学の研究費や研究環境の問題があげられ、これを打開するために文科省は、全国800以上ある大学から「国際卓越研究大学」と「J-PEAKS校」を認定し、集中的に運営資金や援助を行い、研究力向上を図ることを決定しました。国際卓越研究大学には東北大学、京都大学、東京科学大学が、J-PEAKS校には25校が認定されました。弘前大学は、今後5年間で最大55億円程度の支援を受けることとなります。

支援事業はすでに始まっており、福田眞作学長のリーダーシップのもと、教育、人文、理工、農生、医学の各学部が連携し、さらなる研究力向上を目指した組織改革を行っています。J-PEAKSで掲げた「ウェルビーイング研究」に全学的に注力し、グローバルな研究拠点の形成を目指していきます。弘前大学のモットーは「世界に発信し、地域と共に創造する」ことですので、J-PEAKSの支援を活用しながら、より魅力のある地域の総合大学として発展していきたいと思えます。

医学部保健学科通信

保健学研究科 助教
 石川 大瑛
 (平成21年 保健学科卒)

厚生労働省の定める理学療法の臨床実習のプログラムは2020年度入学者から変更となり、本学理学療法学専攻におきましても臨床実習プログラムを新しいカリキュラムとし、5年実施してまいりました。ここでは本専攻における新たな臨床実習への試みを紹介します。

臨床実習の変更点は大きく2点であり、総単位数の引き上げ、臨床実習施設および臨床実習指導者の要件の変更です。総単位数に関しては元々の十分な単位数を確保できていましたが、臨床実習の内容に関して、実習生が診療チームの一員として加わり、臨床実習指導者の指導・監督の下で行う診療参加型臨床実習が望ましいとすると、それに伴い目標も臨床教育者の指導のもとに学生により実施されるべき項目を実施できる、と修正されました。従来型の

実習では、学生が一人の患者を担当することが通例でしたが、新たな実習形式では評価から理学療法の実施までを一貫して行う必要性がなくなり、教員にも臨床現場にも戸惑いがありました。また症例報告の義務がなくなり、レポートも症例レポートから日報へと変更になったこともあり、学生の卒業時のレベルの低下が不安視されました。

理学療法学専攻では臨床実習後の報告会の強化、臨床実習以外での症例レポート課題の作成を行うことで、今まで臨床実習中に行っていた課題を分散して行えるようにしました。実際、臨床実習のストレスは以前より軽減している一方、実習や授業での課題を通じて症例報告相当の知識レベルに達しているものと考えております。

臨床実習の取り組みには、実習だけでなく授業全体を通してまだまだ改善の余地があると思えます。学生がよりレベルアップできるよう臨床実習も日々改善していければと考えております。

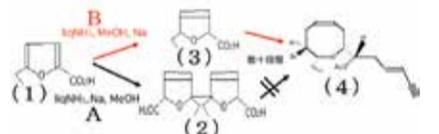
理工学部通信

研究でしびれる
 ということ
 青森県立保健大学名誉教授
 松江 一
 (昭和44年 理学部化学科卒)

1968年に弘前大学の4年生として取り組んだ卒業研究をスタート点とすれば、44年間近く研究開発に携わってきた。その間、「研究でしびれる瞬間」を小生は「セレンディピティ」と言っているが、そのような経験をしてきた。古来、有名な科学者から我々のような平凡な科学者まで、そのような経験が実験科学に関わるヒトを虜にしてきた。ここでは小生が経験した「しびれる瞬間」を一つ紹介する。

小生の学位論文の概要は、海藻でつくられている複雑な低分子の有機化合物ローレンシン(図中の化合物(4)。以降、化合物を括弧書き番号のみで表記)を、試験管の中で何段階かで合成するという天然物有機化学合成に関する研究であり、恩師か

らは「世界の誰もやっていない；独創性」と「世界で初めて；新規性」をもつ研究をせよと言われた。



図：化合物(1)から(4)の合成
 (1)から(3)ができれば目的の(4)が一気にできるのだが、小生が何回トライしても(2)しかできない。この実験は金属Naと液体NH₃を使用する爆発の可能性のある危険な実験であった。博士課程1年生の小生は、4年生に実験を安全に行うため指導をしていた。その4年生がやると、小生がいくらやってもできない(3)がいつも簡単にできたのだ。聞けば「教わった通りにやっただけです」という。詳しく話を聞くと、小生は図中の方法Aを行ったのに対し、4年生は方法Bを行っていた。方法Bは爆発の危険性があるため常識のある人は使わないのだが、非常識がうまくいったのだ。「しびれる瞬間」であった。

